

H29. 9. 19

長尾和宏 (ながお・かずひろ)

東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る。総合診療を目指す。医学博士。近著「病気の9割は歩くだけで治る!」「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。59歳。



Dr. 和の町医者日記



脾臓シリーズ⑦

MRCP (磁気共鳴胆管膵管造影) MRI装置を使って胆管や膵管などの画像を撮影する検査。同様に胆嚢(たんのう)や膵臓の病変を調べる検査には内視鏡から造影剤を注入してX線撮影するERCP(内視鏡的逆行性胆管膵管造影)があるが、画像の鮮明さではやや劣るものの、患者への負担が少ないメリットがある。

みなさんにとって、慢性膵炎はあまりなじみがない病名かもしれませんが、さすが町医者の立場からは、決してまれな病気ではありません。

毎年1万8千人が新たに慢性膵炎と診断されています。このうち男性は女性の4・6倍多

く、75%がアルコールの多量摂取が原因とされています。一方、女性の半数はアルコールが原因ではなく、原因が分からない特発性とされています。アルコールと聞くとすぐに肝臓の障害を連想しがちですが、膵臓の細胞も破壊されます。缶ビール

く、75%がアルコールの多量摂取が原因とされています。一方、女性の半数はアルコールが原因ではなく、原因が分からない特発性とされています。アルコールと聞くとすぐに肝臓の障害を連想しがちですが、膵臓の細胞も破壊されます。缶ビール

慢性膵炎と自己免疫性膵炎

大量飲酒や免疫異常が原因に

2本ないし日本酒2合を毎日飲み続けると慢性膵炎になりやすく、女性のほうがアルコールに弱いとされる分、大量飲酒者でなくとも慢性膵炎に至ってしまう場合があります。

慢性膵炎の自覚症状には、みぞおちや背中への痛み、吐き気などがあります。患者さんには、便に肉眼でも分かるほど脂肪が混じる「脂肪便」がないかどうか必ず聞きます。病状が進行するに従い下痢や体重減少が起

る嫌酒薬や精神安定剤、睡眠薬などを服用しながら、完全禁酒を目指す人も増えています。時にはノンアルコールビールで我慢してもらうよう粘り強く説得します。地域の断酒会を紹介して、仲間同士で励まし合いながらお酒と縁を切ってもらうこともあります。主治医はボクサー

万人あたりの患者数は4・6人。男女比は3・2対1で、平均年齢は66・3歳です。この病気が腹痛のほかに黄疸も発症します。血液検査を行うと、免疫に関する物質であるIgG4が高値を示します。画像診断で膵臓に腫瘍が認められることがあり、膵臓がんとの鑑別が必要な病気でもあります。

慢性膵炎の患者にはアルコール依存症の人が少なくなく、脳の萎縮や肝硬変なども合併していることがよくあります。このため、以前は精神科に長期入院して禁酒することも必要な病気でした。

しかし、最近では軽症の場合には外来でお酒を飲むと不快にな

てもつらいものです。また血糖管理や栄養管理など、さまざまな制限が必要になります。だから慢性膵炎こそ早期に診断して、完全禁酒など医師の早期介入が必要な病気だと思っています。

慢性膵炎とよく似た症状の病気に、自己免疫性膵炎(AIP)という難病があります。平成7年に免疫異常が原因で発症する膵炎が日本から報告され、それが発端となって現在世界で研究されています。人口10

はいけません。